

	<p>2017年7月12日</p> <p>50号</p>
	<p>発行者 鈴木 克彬</p> <p>発行所 ぐんま日独協会 〒371-0105 群馬県前橋市富士見町石井 2445-219 電話 : 027-288-4297 E-mail : info@jdg-gunma.jp</p>

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」でのパネル展『ベルツ博士とぐんま』で来場者を迎えるベルツ博士】

1. 会長のことば	2
2. 第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」報告	3～4
3. ぐんま日独協会への旅	5～7
4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 (連載-2)	8～10
5. 日本百名山 - 独訳 (連載)	11～13
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-9)	14～16

1. 第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」を終わって

・・・ドイツの几帳面さ・こだわりを県民の方々に紹介・・・ 会長 鈴木克彬

ぐんま日独協会は、平成29（2017）年6月30日（金）・7月1日（土）・2日（日）の3日間、群馬県庁ホールにて第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」を開催しました。今回はNHK前橋放送局、群馬テレビ、朝日・読売・上毛新聞等マスコミ各社の告知報道もあり、県民の方々延約1万5千人の参加を得て盛況のうちに行うことが出来ました。皆様のご協力に心底より感謝します。

そもそもこの催しは、平成17（2005）年の『日本におけるドイツ年』を記念しスタートしたもので、その後隔年で開催しています。開催の経過は、その前年、神戸で開催された全国日独協会連合会総会で、当時のシュミーゲロ駐日ドイツ大使から、「日本でのドイツ関連イベントは、どうしても東京、大阪、神戸等大都市が多くなっている。地方都市でも開催出来ないか」とのお話がありました。そこで群馬県国際課とも相談し平成17年から隔年で始まったものです。

目的・内容としては、“明治以降のドイツと日本の深い係わりやドイツ人の国民性、特徴、考え方等を群馬県民の方々にご紹介し、ドイツを知っていただきたい、から始めました。柱は、1 学ぶ、2 食する、3 楽しむの3つです。

1. 学ぶ 会員が約1年かけてテーマを決め、パネル展を実施します。今回のテーマは、ベルツ博士とぐんま(副題 ドイツの温泉・群馬の温泉)です。・・・過去、環境先進国ドイツ諸施策、岩倉使節団の功績の紹介等々・・・
2. 食する 群馬県は公共交通が不便のため殆んどの方がマイカー来場です。そのため、会場での飲食は出来ません。そこで冷凍品ですが、本物(直輸入)のドイツソーセージ、パン等を紹介・販売しています。これが大変な人気です。その他ドイツビール、ワイン、紅茶、ドイツ製おもちゃ、時計、アクセサリ等々を県内のお店に参加していただき、こだわりをもって紹介販売しています。
3. 楽しむ 通常は音楽やダンス関連の方々の出演なのですが、今年は県庁舎改築中のため今回は出来ません。そこで、“ドイツの物づくり”を念頭に、会場でクマさん作りを行いました。これが大成功。次回も実施を考えています。

まとめ：今回のドイツフェスティバルには、延1万5千人という多くの方々がご来場くださいました。県内にこれ程“ドイツに関心のある方”が多くおられるのか、と思うと感激です。

来年は、ぐんま日独協会設立から30年を迎えます。協会員の中にはドイツ留学を終え、現在各所でご活躍中の音楽関係の方が多数おられます。来年秋には、『記念式典と音楽イベント』を実施したいと考えています。皆様のご協力をお願いします。

追記：今回の温泉関係のパネル作成に関し、温泉治療に詳しい元群馬大学教授・白倉卓夫先生（当協会員）から多くのご助言をいただいたことを申し添えます。

2. 第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」報告 (事務局)

6月30日(金)から7月2日(日)までの3日間、第7回「ドイツフェスティバル in ぐんま」が開催されました。

入場者は3日間合計で15,000名を数え、会場は常に多くの来場者で賑っていました。会場は恒例の群馬県庁舎1階県民ホールですが、今回はいつもと大きく異なる点がありました。庁舎の耐震工事がこの4月から始まり12月までかかる工事です。6月・7月のフェスティバル期間中は正面玄関ホールが完全に塞がれて通行ができない状態です。そのためフェスティバルとして使用できるスペースが従来からの四分の三ほどに縮小され、しかも工事の騒音で音楽イベントができず、埃で会場内での飲食が禁止されるという厳しい環境でした。



【正面が板で塞がれた壁】



【奥の壁際は緊急避難場所として恒久的に使用不可に】
【左側は車いすの設置場所になり、使用不可に】

「音楽イベントがないと集客に問題がある」との危機意識から、その穴埋めとして実施されたのがテディベアのクマさん作りワークショップ、クマさんのぬりえ、そして個人所有のメルクリンのブリキ製玩具展示でした。



【クマさん作りグループ1】



【クマさん作りグループ2- お子さんでも簡単に】



【完成したぬりえを展示】

【完成したぬりえを展示】



【メルクリン製ブリキ製玩具に多くのマニアが】

この新規イベントにも多くの来場者が殺到し、ピンチをチャンスに変えることができました。ぬりえにはドイツ製のクレヨンと色鉛筆を使用したところ、塗りやすい！と大好評でした。実はぬりえはお子さん達だけでなく多くの大人の方たちも楽しんでくれました。

今回のパネル展は主題『ベルツ博士とぐんま』、副題として『～ドイツの温泉・群馬の温泉～』として、博士が並々ならぬ興味を抱いた群馬の温泉を取り上げ、ドイツの温泉と群馬の温泉の比較を試みました。1年をかけて10数名の会員が研究・勉強した成果を披露することができました。



【来場者を迎えるベルツ博士胸像と斬新な展示パネルの配置】

ドイツ製品の紹介・販売では恒例のドイツ直輸入のパン・ソーセージ、玩具、時計、紅茶、アクセサリ、ワイン・ビールを扱いました。さらに、群馬県産のドイツパン・ソーセージの販売もありました。今年は工事中のため会場での飲食は禁止ということで、ソーセージと紅茶を会場で楽しむことはできなかったのは残念でした。



【最終日の昼にはもう売るのがほとんどなくなってしまいました】

そんな中、第2日目に応援に駆けつけてくれたタバアさんが、ご自身の著書『日本人が知りたいドイツ人の当たり前』の購入者にサインをしてくれるサービスもありました。この日だけで本が完売。購入者のほとんどがタバアさんとの会話を楽しみながら本にサインをもらいました。また、アンペルマンバッグも大好評ですぐに完売となりました。



【アイドル並みのサイン会!? 本も完売】

最終日は16:00で閉場。すぐに後片付けに取り掛かり、わずか1時間強でほぼ後片付けも終了。一息入れたところで集合写真となりました。みなさん、お疲れ様でした！



3. ぐんま日独協会への旅 (Eva Mallmann さん寄稿)

読者の皆さん、こんにちは！私は東京日独協会で半年間研修をさせていただいたエファです。現在はベルリンの自由大学で日本学を勉強していますが、上手くいけばもうすぐ卒業する予定です。東京日独協会で研修する間に、二回もぐんま日独協会のドイツサロンに参加する機会がありました。

初めて参加したのは2017年1月のときでした。そのとき、近藤夫婦が高崎市を案内してくれました。3人で「少林山達磨寺」に行き、最初にブルーノ・タウトというドイツ人の建築家が二年間住んでいた家を見に行きました。家の中にも入れることができ、とても不思議な雰囲気でした。何年も前に、ここに日本が好きなドイツ人が住んでいたと言うのが分かるようになりました。タウト自身によって書かれた掛け軸にとっても共感しました。そこに「日本の文化が大好き」という文がドイツ語で書いてありました。お寺の祈りの鐘も参じてから、大量のだるまで有名な「少林山達磨寺」の本館に行ってきました。そのお寺から山も綺麗に見え、山の風景が大好きな私とその景色に感動しました。その後お寿司を食べに行き、とても美味しかったです。ぐんま日独協会のドイツサロンにて、私は私の故郷「Rheingau」というドイツのHessen州にある地域について発表をしました。参加者の皆さんにもものすごく優しくしてくれて、皆さんは好奇心が起こされたように聴いてくれたり、様々な質問をしてくれたりしました。参加者の皆さんが本当にドイツのことが大好きという気持ちが伝わってきました。皆さんともっと交流したかったのに、時間があっという間に過ぎてしまって、東京に帰らないといけなかったです。

幸運なことに、二ヶ月後またドイツサロンに参加できる機会がやってきました。3月のドイツサロンに参加しました！そのとき、鈴木会長と会長の奥様が前橋を案内してくれました。お二人が参加するフォーク・ダンスの練習に連れて行ってきて、そこでドイツの伝統的な踊りを教えてくれました。鈴木さんは私が自然が大好きだと分かり、前橋にある自然が多いところにも連れて行ってくださいました。前橋にある、とても綺麗な川岸に行ったり、昔に静岡県から群馬県にもたらされた「河津桜」という早咲きの桜を一緒に見に行ったり、敷島公園という松木が非常に多い公園に行ったりしました。短い間でも様々



【タウトが2年3ヶ月暮らしていた達磨寺「洗心亭」の内部】



【境内で供養される大量のだるま】



【フォークダンス練習風景】



【利根川の河原】

な場所を紹介してくれて、本当に嬉しかったです。その後はもちろんまた「がってん寿司」に行って、寿司をいっぱい頂きました。鈴木さんおすすめの和菓子「おはぎ」も初めて食べて、すごく美味しかったです。お腹がいっぱいになってから、ドイツサロンへ出発しました。今回の参加者でまだ会ったことがない方が多く、皆さんのそれぞれの面白いドイツとの経験を知って、本当に楽しかったです。私は、私が普段住んでいるベルリンでの一番好きなところを発表で紹介をし、皆様がその中で行きたいところを見つけられたら、嬉しいです。今回もドイツサロンで面白いお話と美味しいパンを頂いて、新しい出会いも多く、また次群馬のドイツサロンに行ける機会をお楽しみにしています。



【満開の河津桜】

Guten Tag liebe Leserinnen und Leser, meine Name ist Eva und ich habe bis Ende März ein halbes Jahr Praktikum bei der JDG in Tokyo gemacht. Ich studiere in Berlin an der Freien Universität Japanologie. Während meines Praktikums in Tokyo hatte ich zwei Mal die Gelegenheit das monatliche Treffen der JDG Gunma zu besuchen. Das erste Mal war im Januar 2017. Das Ehepaar Kondo war so freundlich mir Takasaki zu zeigen.

So fuhren wir zum Daruma-Tempel und die beiden zeigten mir das Haus, in dem der deutsche Architekt Bruno Taut seine Zeit in Japan verbracht hat. Im Haus war unter anderem eine, von Taut selbst verfasste, Schriftrolle aufgehängt, auf der der Satz „ich liebe die japanische Kultur“ geschrieben stand. Da kann ich Taut nur zustimmen. Nachdem wir eine Gebetsglocke besucht hatten, ging es dann zur Haupthalle des Tempels, wo tatsächlich sehr viele Daruma Figuren zu finden waren. Außerdem hatte man von dort auch eine schöne Aussicht auf die Berge in der Ferne. Danach gingen wir Sushi essen und anschließend fuhren wir zu dem Mitgliedertreffen der JDG Gunma. Dort habe ich einen Vortrag über meine Heimat in Hessen, den Rheingau gehalten. Die Teilnehmer des Mitgliedertreffens waren alle so interessiert, super nett und sie haben viele interessante Fragen gestellt. Ihre Begeisterung für Deutschland war deutlich zu spüren.

Die Zeit verging wie im Flug und schon musste ich wieder zurück nach Tokyo. Zum Glück ergab sich schnell die Möglichkeit für mich, wieder an dem Treffen teilzunehmen.

So kam ich im März wieder nach Gunma. Dieses Mal zeigten mir Herr Suzuki und seine Frau Maebashi. Die Beiden sind Mitglieder einer Volkstanzgruppe zu deren Treffen sie mich einluden. Dort brachten mir die Mitglieder deutschen Volkstanz bei, den ich selber gar nicht kannte. Herr Suzuki wusste, dass ich die Natur und japanische Landschaft liebe, deswegen beschloss er mit seiner Frau, mir solche Orte in Maebashi zu zeigen. Wir fuhren zu einem Fluss, von dem aus man einen wunderbaren Blick auf die Berge hatte. Anschließend zeigten die beiden mir blühende Kirschblüten. Es handelte sich dabei um eine besondere Art der Kirschblüte, die bereits Ende Februar bis Anfang März blüht.



【Shikishima Park】

Außerdem besuchten wir den Shikishima Park, in dem sowohl Kirschbäume als auch Kiefern zu finden sind. Danach gingen wir Sushi essen und Herr Suzuki empfahl mir zum Nachtisch „Ohagi“ was wirklich sehr lecker war. Der Mitgliedertreff danach hat wieder sehr viel Spaß gemacht. Es waren einige Leute dort, die ich noch nicht kannte und es war schön von den Deutschland-Erfahrungen der Teilnehmer zu hören.

Ich habe einen Vortrag über meine persönlichen Lieblingsorte in Berlin gehalten - und hoffe, dass die Teilnehmer darunter vielleicht einen Ort gefunden haben, den sie gerne besuchen würden. Es gab auch wieder sehr leckeres Brot, was ein Mitglied immer backt und mitbringt. Die Atmosphäre und Gespräche bei dem Mitgliedertreffen sind immer sehr schön und ich hoffe, ich kann bald wieder teilnehmen.

4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 - その2 (對馬 良一 記)

当時は札幌まで半日かかった。清水沢、追分、岩見沢での乗り換えだった。札幌まで父が同行することになった。途中の岩見沢から従姉妹の對馬スミちゃんとスミちゃんの従姉妹で、はじめて会う小柄の少女葛西節子さんが札幌まで行くことになり、全員で三菱の保養施設三省寮に泊まった。縁とは不思議なものでそのときの少女が現在の私の妻、節子である。

私の留守の間、スミちゃんの妹の愛子ちゃんが我が家の食事等のお手伝いに来てくれた。親戚みんなで私のドイツ派遣に協力してくれた事に感謝している。

札幌事務所では「君たち（美唄鉱業所から小林武君）二人は北海道の三菱を代表してのドイツ派遣である。他社の人に負けないよう頑張るドイツの優秀な炭鉱技術を取得して会社の発展に寄与してください」と水越札幌支店長から大きな使命を頂いた。

「よし、だれにも負けないぞ・頑張るぞ」と心に誓ったのは22歳の厳寒の冬だった。

札幌から函館行きに乗ったのは昭和33年1月17日午前8時だった。

青函連絡船は大雪丸で波が高かったが疲れていたのかぐっすり寝こんだ。

1月18日午前10時に上野駅に着き、丸ビルの本社で伊藤保次郎社長ほか西島副社長、大槻文平重役など会社幹部の方々の挨拶と帝國ホテルでの会食だったが、味より汗が背中を流れ食事の味などは分からなかった。

夜は三菱健康保険会館に三菱各社からの派遣者6名と泊まる。

高島・南園秀明、鯉田・西田富一、飯塚・長岡正隆、上山田・和田武、美唄・小林武、大夕張・對馬良一の6名である。この6人が3年間三菱の名誉をかけてドイツで頑張ろうと誓った。

その夜大夕張炭鉱労働組合、山本組合長がすき焼きをご馳走してくださった。

1月20日より横浜移住斡旋所で1週間渡航準備の講習を終え1月28日午後6時搭乗し日本を離れた。移住斡旋所には海外に移住するブラジル移民の人たちが多く宿泊していた。プロレスの猪木少年もこの中にいたとの話が後日あった（真偽は不明）。

横浜移住斡旋所での講習会ではドイツでの生活の規則や生活習慣、日本との生活様式の違いなど事こまかく教えられた。60名の派遣者の中には、四月から実施される売春法禁止前の、夜の伊勢崎界限や知人の家に宿泊するものもいて、外務省の宮広事務官は連日注意をしていた。三菱の6人は毎回きちんと講習を受講した。

講習最終日に今回の派遣労務者の代表者に三井美唄山出身で九州工大卒三井山職員の高口岳彦君が選ばれた。高口氏は温厚な青年で英語の達人な人で適任者である。

また、派遣者の中には、組合活動や歌声サークルの責任者なども多くいる。自分も大夕張鉱の青年部長だったので話が合う仲間も沢山いた。

3年後に皆の気持ちがどのように変化しているか？西洋の民主主義の影響は...自分にも分からない。

羽田空港を真冬の1月28日午後6時30分、大勢の見送りを受けチャーター機SAS（スカンジナビア航空）ダグラス DC6B 型の南回りで、各地で給油しながらドイツに向かう。

最初の給油地はマニラだった。冬の日本から真夏のマニラで上着、下着、の着替えで大変だった。休憩時に初めて飲んだコカコーラの奇妙な味は今でも忘れられない。

マニラ、バンコック、カラチ、バイルート、ローマ、デュセルドルフと経由して目的地まで47時間のフライトだった。

マニラの空港の休憩時間は二時間だが給油が終わり次第離陸ですので空港の外には出ることができない。マニラと日本は時差が二時間と聞いた。



【マニラ空港で給油のため飛行機から降りる一行】



【マニラ空港ターミナル内でくつろぐ一行。女性は空港職員】

バンコックまでの飛行中のまどから見える山々や草原はすごい迫力でした。短時間の休憩ですぐカラチに向かう。乗務員からカラチは軍事基地ですので機内からでもカメラの撮影は禁じられた。中東の国々を経由してようやくローマに着いた。ローマ空港に来て初めてヨーロッパに来た感じがした。

ドイツの現地時間 10 時 15 分デュセルドルフ空港に着陸した。長時間の飛行で時差ボケもなかった。ここがドイツだ。飛行場近辺もスモックで薄暗い。世界有数のルール工業地帯のど真ん中である。空港には会社の関係者や会社の先輩の会場金美氏の顔も見える。挨拶の通訳は三菱鉱山でドイツに留学中だった後明庫之助氏でした。この時の後明氏の堂々とした態度は今でも忘れられません。三菱出身ということで「對馬君ですね、ドイツ人と話すときは相手の目を見て話すように、ペコペコ頭を下げることはしない」。この言葉は三年間のドイツ生活で私はいつも心がけていた。

身長が相手の肩くらいなのに相手を見上げるように話す態度は印象的だった。新聞社のカメラマンやラジオのアナウンサーなどで空港は大変な人だった。「若い日本人の息子たちがドイツに来た」と大々的に報道された。非常に親日的で戦時中の三国同盟の影響か？アジアの小国日本にこれほど歓迎してくれるドイツは、ヨーロッパの中の、「おっかさん」の様な大きな国に思えた。空港からアウトバーンに乗ったが時速 100 キロで走るバスをすいすいと追い抜いていく車のスピードに驚かされた。

世界で名高いルール工業地帯でこれから三年間生活すると思うと不安や希望で複雑な気持ちだった。車も欲しい、車の免許も取りたい、日本に帰えたら車を買うか？

空港から 1 時間ほどで人口 38 万人のゲルゼンキルヘンに着いた。

宿泊寮はレンガ造りで寮の敷地内には大きな炭鉱の立坑ヤグラがある。寮では歓迎会の準備がしてあり会社の重役や関係者が大勢来ていて大きな声で歓迎の挨拶ですが言葉も分からず疲れで苦痛だった。

この日、昭和 33 年 1 月 30 日（1958 年）からドイツでの生活のスタートだった。

（続く）

5. 日本百名山 87 白山 (2702 m) ドイツ語訳その1

深田 久弥 作 深田 勝弥 訳

Japan hundred berühmten Berg Nr. 87 Haku-san (2.702 Meter)
durch FUKATA Kyuya
Probeübersetzung von FUKATA Katsuya

87-01

日本人はたいていふるさとの山を持っている。
山の大小遠近はあっても、
ふるさとの守護神のような山を持っている。
そしてその山を眺めながら育ち、
成人してふるさとを離れても、
その山の姿は心に残っている。
どんなに世相が変っても
その山だけは昔のまま、
あたたかく帰郷の人を迎えてくれる。

Japaner haben meistens einen Berg ihrer Heimat.
Egal ob der Berg großen oder klein, fern oder nah ist,
er ist für sie ein Symbol, das sie mit Heimat gleich setzen.
Sie wachsen an dem Ort auf und sehen immer diesen Berg.
Wenn sie erwachsen sind und die Heimat verlassen haben,
geht ihnen die Gestalt des Berges nicht aus dem Sinn.
Die Welt ändert sich zwar, aber dieser Berg bleibt bestehen.
Er heißt die Heimkehrer willkommen.

87-02

私のふるさとの山は白山であった。白山は生家の二階からも、小学校の校門からも、鮎釣りの川辺からも、泳ぎに行く海岸の砂丘からも、つまり私の故郷の町のどこからでも見えた。真正面に気高く美しく見えた。それは名の通り一年の半分は白い山であった。

Der Berg meiner Heimat ist der Hakusan. Ich sah den Hakusan von der ersten Etage meines Elternhauses, vom Tor meiner Grundschule, vom Flussufer, wo ich Giebel angelte, vom Sandhügel am Strand, wo ich immer schwamm, auch von der Stadt, aus irgendeiner Richtung. Ein halbes Jahr lang war er weiß, wie sein Name sagt.

87-03

純白の冬の白山が春の更けるにつれて斑になり、その残雪があらかた消えるのは六月中旬になってからであった。そして秋の末から再び白くなり始める。最初は冬の先触れとして峰のあたりにわずかの雪をおく。それがだんだん広がって十二月の中頃には、もう一点の染みもなく真っ白になってしまう。そしてそれが翌年の春まで続くのであった。シベリアから日本海を渡ってくる寒い季節風が、白山という大障壁にぶつかって雪と化してしまうのである。

Im Winter war der Hakusan blütenweiß, wenn der Frühling ins Land zog, wurde er mit dem Vorrücken der Zeit immer scheckiger. Ungefähr Mitte Juni war der ganze Schnee geschmolzen. Im Spätherbst wurde er langsam immer weißer. Zuerst bildete sich um die Gipfel herum eine dünne Schneeschicht als Vorbote des Winters. Nach und nach breitete sich die Schneedecke aus. Mitte Dezember war er ganz von Schnee bedeckt bis zum nächsten Frühling. Der kalte Monsun aus Sibirien weht über das Japanische Meer. Er stößt gegen den Hakusan, der wie eine Barriere ist, und verwandelt sich in Schnee.

87-04

おそらく諸君の多くは日本の中部の山から、北に当って遠く、雲の上に浮んだ白山を見逃しはしなかつただろう。そしてそれは孤高の気品を持って諸君を打ったに違いない。わが国でアルプスと八ヶ岳について高いのは白山である。古くから駿河の富士山、越中の立山、加賀の白山は、日本三名山と呼ばれた。厳密に言えば、白山は加賀、越前、飛騨にまたがっているのだが、それをあえて加賀の白山と呼んだのは、そこから見た姿が、一番すぐれていたからであろう。

Ihr Leser habt euch meistens wahrscheinlich den Hakusan nicht versehen, der auf dem Wolkenmeer von Mitteljapan fern nach Norden schwimmt. Und er muss euch mit seiner unvergleichlichen Würde begeistert haben. Der Hakusan ist der höchste Berg in Japans, nach den Japanischen Alpen und dem Yatsugadake. Von jeher sind der Fujisan in Suruga, der Tateyama in Etschuh und der Hakusan in Kaga die „drei heiligen Berge Japans“ genannt. Ehrlich gesagt, überschreitet der Hakusan die Grenzen des Landes Kaga, Echizen und Hida. Doch man nennt ihn „Hakusan in Kaga“, weil seine Form dort am schönsten aussehen muss.

87-05

その加賀の平野でも、私のふるさとの町から眺めるのが最上であることを、私は自信をもって誇ることができる。主峰の御前と大汝を均衡のとれた形で眺め得るのみでなく、白山の持つ高さや広がり、最も確かに、最も明らかに認め得るのは、私の町の付近からであった。戦後私はふるさとに帰って三年半の孤独な疎開生活を送ったが、白山はどれほど私を慰めてくれたことか。徹夜して物を書いた明け方、最初の光線が窓ガラスに射してくると、私は立ち上がって外をうかがう。もしハッキリ山が見えそうな天気であると、町外れまで出て行き、そこから遮る物のない早暁の静寂な白山を、心ゆくまで眺めるのを常とした。

Ich bin mit Sicherheit stolz darauf, dass er von meiner Heimatstadt besonders am schönsten zu sehen ist. Weil seine Form von dem Stadtrand, nicht nur die Gleichmäßigkeit der zwei Hauptgipfel von „Gozen“ und „Ohnanji“, sondern auch seine Höhe und Ausdehnung am klarsten und am deutlichsten zu sehen ist. Als ich nach dem Weltkrieg heimgekehrt bin und während dreieinhalb Jahren lang einsam lebte, hat der Hakusan mich so sehr getröstet! Nach der Nachtarbeit, scheint das Morgenlicht ins Fenster. Dann erhebe ich mich vom Schreibtisch und spähe nach draußen. Wenn der Berg klar zu sehen ist, gehe ich an den Stadtrand und sehe den stillen Hakusan in der Dämmerung, bis ich damit zufrieden bin. Das war meine Gewohnheit.

87-06

夕方、日本海に沈む太陽の余映を受けて、白山が薔薇色に染まるひとは、美しいものの究極であった。みるみるうちに薄鼠に暮れゆくまでの、暫くの間の微妙な色彩の推移は、この世のものとは思われなかった。

Es war eine Stunde am Abend äußerst schön. Den Hakusan rosa färbend, geht die Sonne schnell im Japanischen Meer unter. Es scheint mir gar nicht weltlich, das Vorrücken bis zur dünn grauen Farbe.

続く

事務局註：

深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されています。百名山の順番に従って掲載するのが常套ですが、第1回目は深田久弥氏の故郷である石川県にある白山から始めます。スペースの関係で「白山」を2回に分割しての掲載です。

6. デザイナー修行奮闘記 - 連載 10 (井上 晃良 記)

私の「鉄道デザイナー」への道 III

列車が一路ドレスデンへ向かう途中に停車した駅で、車窓から小型の蒸気機関車が入換作業をしているのが見えた。この時、思わず車内から機関車にカメラを向けシャッターを数枚切ったところで同室の紳士から写真撮影をとがめられたのである。彼が言うのには、「鉄道施設は撮影禁止なので、誰が見ているかわからないからやめたほうが良い...」と。だから今迄カメラを持っていてもシャッターは切らなかった。この機関車はおそらく 99 形であろう。遠方から狙った、車内からのガラス越しのひどい写真であるが、現像したら一応数枚写っていたこの蒸気機関車が、後に東独旅行の目に見える唯一の収穫であったのである。

列車は、無事ドレスデン中央駅に到着した。このドレスデン中央駅はザクセン州の州都に相応しい立派な三重のドームを持つ駅舎である。ただ、昔のままなので全てが薄暗い駅舎であるのはどの東独駅にも共通するもの。現在はその壮大な建物のイメージはそのままに、世界的な建築家であるノーマン・フォスターによるモダンで明るい駅舎に生まれ変わっている。

到着後、まず帰りの列車の予約をこの駅で行った。駅の窓口は切符の予約や発券がコンピュータで行われていたようであるが、マシンがひどく古臭く感じられた。今度はベルリンへ戻るのではなく、直接西ドイツに直通する列車を予約したのである。もし東ドイツ国内駅迄の切符であれば東独マルクで支払えるが、西側へ直接行く切符の場合は西ドイツマルク支払となる。この価格差は大きいが致し方ない。それ故今回は 2 等車である。更にその列車はドレスデン中央駅発ではなく、ドレスデン・ノイシュタット駅始発とのこと。間違えては大変である。

切符を買い、夕闇迫る街中をホテルに急いだ。西ベルリンを出発してから 1 日ばかりである。エルベ川沿いの古都ドレスデンの街並は、聖母教会やザクセン州立歌劇場が有名で、今はドイツでも指折りの美しい街として名を馳せているが、我々が旅行した時は、ベルリン以上に美しいながらも煤けた重い空気が街を覆い、全ての建物はくすんで暗いイメージであった。その原因は、主に暖房設備に使う石炭燃料を燃やした煤煙によるものでもあるが、西側の恵まれた土地しか知らない私には、この煤煙が鼻につき耐えられないほどであったのである。

現在は美しい本来の姿に蘇ったドレスデンのランドマークでもある聖母教会は、第二次大戦時に英国軍による空爆で大きく破壊されたままの姿で、修復工事も間々ならない無残な姿を晒していた。

結局ほとんどドレスデンの街並みを楽しむ訳でもなく、早々に宿に戻って夕食にしようとホテル内のレストランに行くが、これも驚いた。何故ならレストランに入るのに長蛇の列だからである。比較的並ぶのに慣れた日本人の我々も少々イライラしながらも列の最後に並んで順番を待ったのである。いよいよ我々の番になる直前のこと、お店の従業員は我々が宿泊客であることに気づき、「ご宿泊のお客様は先に通しましたのに…」と言われ、一層疲れが出たのは言うまでもない。当時そこまでドイツ語のコミュニケーションが堪能ではなかった私には、このような試練は日常であったのである。

宿泊したホテルは特に悪い印象もなく、西側同様清潔で快適な宿泊ができたと思う。翌朝出発なので我々は早めに床に付いた。翌朝は朝食後すぐに荷物をまとめドレスデン・ノイシュタット駅に急ぐ。既に列車は出発を待っていて我々は乗り込むのだが、やはり DR（東ドイツ国鉄）の車両は、同じドイツの車両の個室でも DB のそれとは違う雰囲気である。列車が出発し、ドレスデンの街並みや工場地帯、田園風景と続く車窓を眺めつつ西へと向かう。ここでも空は暗くよどんでいて、とにかく重苦しい空気を感じている。本来旅行は楽しむものであるが、この時ばかりは、出来れば早く西側に帰りたいたいという気持ちになっていたのである。しかし看板にバウハウス書体が使われていたりするのを発見するなど、戦前から時間が停止していたような光景を目にすると、その一瞬が貴重であったと気づくのである。ようやく国境駅に到着し、再び出国前の東独側の忌まわしい出国検査を終え、列車が出発すると、急に「ようこそ西ドイツへ」と言う明るい車掌の声が聞こえてきた。それは DR から DB の車掌に交代し、西ドイツに入ったということである。何故かそれ迄重たいよどんだ空が車窓を占めていたのに、急に空が晴れわたり驚いたことも憶えている。まさに私自身の心の中にあつた霧が晴れ渡るのと同じでもあつたのである。西ドイツに入国してからは、列車のスピードも上がり、ブレーメンには予定時刻に到着したのである。確かに当時の東ドイツは、私の五感に大きな刺激を与え、またそれがあまりに強烈であつたために、その恐怖から早く逃れたいとも思ったのだが、極めて平和な西ドイツに戻ると、あの体験は貴重であつたと改めて感じたのも確かで、も少しドレスデンを見るべきであつたとも後悔したのである。今となっては当時の社会主義の雰囲気は味わえないが、そこにいる人々や文化の香り溢れる美しい風景は更に輝きを増したに違いない。



東ベルリンのSバーン



ドレスデン中央駅



ドレスデンの街並み



奥に聖母教会が見えるドレスデン旧市街

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03』に掲載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)